エカチェリーナⅡ世のエルミタージュサロンと日本18世紀ロシア研究会

中 神 美 砂

ロシアの 18 世紀後半は，女性が読書と教育の普及により社会の中での女性の地位が向上した時代であり，この地位向上に大きな影響を及ぼしたのがエカチェリーナⅡ世（在位1762-96）である。

その女性の地位向上と深く関係していたのが，17 世紀初頭にフランスで始まったサロン文化だった。18 世紀のロシアは，ヨーロッパ文化の中心だったフランスのサロン文化を模倣し，受け入れた。ロシアでこの女性サロンを組織したのが，啓蒙君主として名高いエカチェリーナⅡ世や科学アカデミーとロシア・アカデミーの指導者を務めた E.R.ダーシコヴァ公爵夫人などである。この二人は共に『回想録』[1] を記し，その中でサロンの存在と重要性を明らかにしている。エカチェリーナⅡ世はサロンの女主人として有名なジョフラン夫人や啓蒙哲学家ヴォルテールやディドロと文通していた。また海外経験が長いダーシコヴァはネッカー夫人，ジョフラン夫人，ヴォルテールやディドロなどと実際に会って会話を楽しむ知己の間柄だった。

ダーシコヴァは，息子がエジンバラ大学留学中に自宅でサロンを開いていたことを『回想録』に次のように記している。「開明性と道徳面で尊敬に値する教授たちと知り合い，週二回，ロバートソン，ブレア，スミス，ファーガソンがきて，昼食をとり，時間を過ごしました。その他にスコット夫人も私達の仲間に加わり，私の人生の喜びをつくってくれました。これはこの世で私に与えられた最も穏やかな，幸せな時間でした」。[2] 18 世紀の傑出した女性二人の最初の出会いも当時のエリザヴェータ帝の副宰相を務めていたダーシコヴァの叔父の家で開かれた夕べ（サロン）だった。

サロン文化はロシアでも 19 世紀前半に花開くことになる。サロンの女主人は，ロシアでもフランスと同じように裕福な名門貴族の出身で，当時の最高の教育を受けた Z.A.ヴォルコンスカヤ，E.P.ロストプチナなどだった。ロシアのサロンでは文学，演劇や政治の話題などが討議され，詩の朗読会や音楽界が開かれ，上流社会の人たちが会話を楽しみ，知

[1] *Дашкова Е.Р.* Записки. М., 1987; *Екатерина II*. Памятник моему самолюбию, обственноручные записки. М., 2003. С. 172-540.

[2] *Дашкова*. Записки. С. 115.

恵と感情を訓練する場所だった。ロシアの文化史家 Yu.M.ロートマンは「19 世紀前半の文学サロンは，当時の才能ある女性が自らのアイデンティティを示す手段であった」[3] と記しているし，V.E.ヴァツーロは，「文学サークルをつくりだした『女性読者』はロシアの啓蒙の成果だった」[4] と記している。

1996 年に T.E.スモリヤニノヴァは「エカチェリーナⅡ世のエルミタージュサロン」[5] でエルミタージュサロンに関する研究はあまりされていないと述べていたが，2011 年に T.I.アキモヴァが「啓蒙の世紀のエカテリーナⅡ世のサロンとフランスサロン：継承性と原則的な新規性」[6] を発表，その後もエルミタージュサロンの研究成果[7] を活発に発表し続けている。これらの論文と M.I.プイリャエフの『皇帝のペテルブルグ百科全書』,[8] K.V.マリノフスキーの『18 世紀のサンクト･ペテルブルグ』[9] などを参考にエルミタージュサロンが何故再び注目を浴びているのかを紹介し，その後金沢先生が重要な役割を果たしていた 18 世紀研究会について触れたいと思う。

エカチェリーナⅡ世が組織したエルミタージュサロン，正式の名称は小エルミタージュの集まり（Собрание малого Эрмитажа）は，極めて限られた人から構成されていた。小エルミタージュは，エカチェリーナⅡ世がサロンの女主人としてゲストと知的会話を催すために 1764 年から 1767 年にかけてフランス人建築家フェリテンなどにより冬宮に増築された。このサロンは，エカチェリーナⅡ世が公務や宮廷儀式から離れて休息する場所であり，自由の精神が宿っていた場所だった。エカチェリーナⅡ世によるサロン設立には，ヴォルテールやディドロといったフランスの啓蒙思想家との文通が大きな影響を与え，実際に女帝は百科全書派のダランベールやディドロにはロシアを訪れるように要請している。後にディドロは，1773 年から 1774 年にかけてエカチェリーナⅡ世のサロンを訪れている。

スモリヤニノヴァによれば，エルミタージュサロンはサロンの構成者の人数にしたがって，大サロン，中サロン，小サロンに分けられていたとされる。大サロンでは主として政治国家問題について討議，そのため参加者は貴族の大臣や外交官だった。中サロンでは上流社会と文化について討議，上流貴族のほかに国内外から文芸家，芸術家，哲学者などが招かれた。小サロンは娯楽的要素が強く，上流社会のエチケットもなく，哲学問答などの

---

[3] *Лотман Ю.М.* Семиосфера. СПб., 2001. С. 89.

[4] *Вацуро В.Э.* Из истории литературного быта пушкинской поры. М., 1989. С. 5-6.

[5] *Смольянинова Т.Е.* Эрмитажный салон Екатерины II // Екатерина Великая: эпоха российской истории. СПб., 1996. С. 274-277.

[6] *Акимова Т.И.* Салон Екатерины II и французские салон эпохи Просвещения. М., 2011. С. 215-225.

[7] *Акимова Т.И.* Развлекательно-литературный характер эрмитажного салона Екатерины II // Е.Р. Дашкова и XVIII век. М., 2012. С. 188-198.; Выражение личностного самосознания в малых жанрах эрмитажного салона Екатерины II // Е.Р. Дашкова в кругу современников. М., 2013. С. 262-269.

[8] *Пыляев М.И.* Энциклопедия императорского Петербурга. М., 2006. С. 605.

[9] *Малиновский К.В.* Санкт-Петербург XVIII века. СПб., 2008. С. 576.

言葉遊びがおこなわれたり，エルミタージュ劇場での劇の準備などがおこなわれたとされる。また，アキーモヴァはエルミタージュサロンは会話を楽しむ自由な文学サロンだったと述べている。マリノフスキーは，「エカチェリーナⅡ世は，定期的に一ヶ月に数回劇や室内楽コンサート，遊びなどの娯楽的要素のある夕べを催し，この夕べは昇降式テーブルを備えた小エルミタージュでの夕食で終わりとなった。[…] こうしてエカチェリーナⅡ世のエルミタージュの集まりが始められた。そこには女帝に近い選ばれた人たちが招待された」[10] と記している。招待されていたのは，E.P.ダーシコヴァ，Ya.A.ブリュス，A.N.ナルイシキン，A.S.ストロガノフ，G.A.ポチョムキン，セギュール伯爵といったロシアの上流貴族やフランスの外交官など，女帝に極めて近い関係者のみであった。

宮廷儀式日誌を基にダーシコヴァとエカチェリーナⅡ世との関係を論じた L.V.トィチニナの『ダーシコヴァ公爵夫人と宮廷』[11] によると，小エルミタージュではエカチェリーナⅡ世主催の食事会が「大食堂」，「小食堂」，「居室」の 3 つで催されている。夕方に催された親密な関係の人のみが出席を許された「居室)」での食事会についてダーシコヴァは回想録に「宮殿の居室で催している特別の招待状がなくしては入れないコンサートに，女帝が招待してくれました」[12] と記している。

エルミタージュサロンは，君主の隠れ家の役割を担い，さらに宮廷に対して批判的立場と自由な雰囲気が特徴的な啓蒙家のサロンの伝統とを兼ね備えていた。啓蒙家のサロンの伝統となっている自由と平等を証明する興味深い事実がある。エカチェリーナⅡ世が自ら定めた 10 項からなるエルミタージュサロン規約である。アキモヴァは論文の中で，これらの規約は当時の科学アカデミーの規約をパロディ化したものだと指摘している。

マリノフスキーは，このサロンに出入りしていたフランス人外交官コルベロンの 1776 年の日記などを引用して，サロンの様子や規約について記している。「この小さな住居に女帝がいると女帝の周囲には自由な雰囲気があり，誰もが好きなように座っている。[…] ドアの中に入ってくるすべての人が守る規約。1. 全ての官位を帽子と同様に，特に剣はドアの外に置いてくること。2. 門地優先制度と傲慢さは，何があってもドアの側に置いてくること。3. 明朗であること，ただし，何かを傷つけたり，壊したり，噛み付いたりしないこと。4. 誰にもかまうことなく，気楽に座り，立ち，歩きまわること。5. 他の人が頭痛をおこなさないように温和に，大きな声で話さないこと。6. 怒らないで，熱くならないで議論すること。7. ため息をついたり，欠伸をしないこと。8. どんな気晴らしでも他人の邪魔をしないこと。9. 食事をする時はおいしそうに食べ，ドアから出る時は自分の足で出れるように適度に飲むこと，10. 居間から争い事を持ち出さないで，ドアから

---

[10] *Малиновский.* Санкт-Петербург XVIII века. С. 424.

[11] *Тычинина Л.В., Бессарабова Н.В.* Княгиня Дашкова и императорский двор. М., 2006. С. 173.

[12] *Дашкова.* Записки. С. 146.

出る前に忘れること。特に最後の規則を破った者は，それ以後のサロンの訪問が禁止された」。[13]

第 1 項と第 2 項で，百科全書派の重要な啓蒙の精神・平等の原則を規定し，その後の項目で自由な雰囲気をつくりだしている。こういったエルミタージュサロンの規約は，極めて選抜された人の中で，エカチェリーナⅡ世の私的空間で採用されたものだった。エルミタージュサロンは，フランス文化への憧憬を絶えず持ち続けていたロシア貴族たちが啓蒙の考えと新しいヨーロッパ文化の成果に触れることができる場所となった。サロンの訪問者は世界の絵画の傑作，書籍，鉱物といった最高の価値あるコレクションなどをみることができた。サロンという知的で，かつ極めて私的な空間と会話をエカチェリーナⅡ世と共に体験したことによって，女帝が主張する開明的な新しい種類の人間となる上流貴族を育てる事につながったと考える。さらに，自らが定めた規約のもとに活発にくりひろげられたエカチェリーナⅡ世のサロン活動は，女帝が啓蒙君主であることをヨーロッパ世界に知らしめる格好の宣伝手段になったのである。

さて，長い前置きとなったが，金沢先生が長年事務局長をつとめられていた日本 18 世紀ロシア研究会は，18 世紀を愛し，テーマとして選んだ研究者の集まりである。研究分野は限定されておらず，言語から文学，歴史，思想まで幅広い分野で 18 世紀に関心を抱く人たちが年に一回研究会を開いている。ここでは若い研究者から名誉教授までが，関心を抱いているテーマで報告をおこなっている。密かに自由な知的な雰囲気はエルミタージュサロンにも劣らないのではと思っている。大学を卒業してからかなりの年月が経過した後，東京外国語大学大学院で再び学びの道に入った私にとって，18 世紀研究会での金沢先生を含めて経験豊かな先生方との語らいは，18 世紀の女性研究をおこなうことになった事を良かったと思わせてくれる時間だった。この 18 世紀ロシア研究会は，18 世紀の様々な分野への関心を抱き続けさせてくれるサロンだと思う。

[13] *Малиновский.* Санкт-Петербург XVIII века. С. 424-425.